

自由意志信念の科学的研究の意義

山口尚 (Sho YAMAGUCHI)

京都大学

社会心理学の諸研究は一般に《人間が自律的に生きるとはどのようなことか》を考
えることについての刺激的な示唆を備えている（と、管見ながら、発表者は感じてい
る）。自律的に生きること——これは、私たちが他から操られた生を営むことを多かれ
少なかれ忌避する存在である以上、私たちすべてにとって無視できない関心事である。
それゆえ、社会心理学の研究一般の意義や価値は疑うべくもない。

本発表の題名は「自由意志信念の科学的研究の意義」である。すなわち、社会心理
学や実験哲学において実践されている〈自由意志信念に関する実験的研究〉の価値や
意義を考察する、というのが本発表の目標である。言うまでもなく、こうした研究は
社会心理学の他の諸研究と同等の重要性をもつ（なぜならこうした研究も、その他の
同タイプの研究と同様に、どのような信念がどのような仕方で私たちの行動へ違いを
与えているのかを教えるからである）。他方で——発表者の^{イデオロギア}誇大妄想が伴っているかも
しれないが——本発表では次の可能性を模索したい。それは、自由意志信念に関する
研究は社会心理学の諸研究のうちで独特の地位（「特権的な地位」とまでは言わないが）
をもつのではないか、という可能性である。この可能性を積極的にサポートできれば、
哲学者が自由意志信念をめぐる実験的研究へ関心をもつべき動機は増大する（そして
この動機は、実に、自由意志についての実験哲学へ関心をもつべき根拠と地続きであ
る）。

いささか素朴な（とはいえ間違っているわけでない）発想から出発すれば、社会心
理学の研究の真価、すなわち私たちの生にとっての実践的価値、はひとつに《それが
私たちの自律を高めることにどれほど貢献するか》で測られる。他方で——この点は
本発表で強調したいが——《あるタイプの信念が一定の行動傾向を増大させる》とい
う社会心理学的知見がどのような仕方で私たちの自律を増大しうるかは明確でない。
なぜならこの点の明確化は信念と行動の関係についてどのようなモデルを採用するか
に関わるからである。例えば——最大限粗っぽく言えば——信念が外的な原因として
主体の行動を操作するというモデルをとれば、〈一定の信念を取り除くことによって主
体の自律を高める〉という発想が生じる。他方で、主体が信念を理由として参照しな
がら行動を自ら選択するというモデルをとれば、〈一定の信念を供給することによって
主体の自律を高める〉という発想が生じる。要するに、信念と自律の関係は一筋縄で
はいかない——じっくりと考察する必要がある。

自由意志信念の社会心理学的研究の特徴は、数多ある信念のうちで、自由意志に関する信念を対象とする点にある。他方で、仮にこの種の研究から得られる一般的示唆を《自由意志に関する信念が私たちの行動傾向へ変化を与える》という事態だと見なすならば、自由意志信念をめぐる社会心理学の知見の独特の身分が垣間見える。なぜならこの知見もまた自由意志に関する信念の一種だからである。社会心理学的知見それ自体も、いまだ見通せない仕方で、私たちの行動傾向を変えている（そして似たような事態が自由意志をめぐる実験哲学においても成立する）。——本発表ではこうした点をより精密に考察したい。